こんな日もある

ユカコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな日もある

【Ｎコード】

Ｎ１８５３Ａ

【作者名】

ユカコ

【あらすじ】

普通に人生を送りたい主人公源敬輔（ミナモトケイスケ）は、どうやら異常なまでもたくましい主婦に成り上がった母親やほんのり恋心を抱く前川慶子（マエカワヨシコ）の隠された本性そして普通でない周囲の人間たちに振り回され・・・・・・

女って・・・

かえりたい……

大安売り！　卵１パック５０円先着５０名様＆トイレットペーパー１２ロール１００円お一人様２つまで！！

母さんが隣で呪文のようにブツブツとつぶやいている。っていうか朝早くからなぜ僕が開店前のスーパーで大安売りの行列に参加しなければいけないのさ。ちぇっ、とても憂鬱。

横で鼻息荒くしている母さんに気づかれるか気づかれないかくらいの具合いで１分くらい睨み続けてみたが、母さんの頭の中は開店してから店の中に入るまでのシュミレーションやどういうルートがより最短かつリスクが少ないかを考えることでいっぱいのようだ。

僕が普段母さんに頭が上がらないのをいいことに、ひたすら召使いのように扱う。

だいたい卵なんて昨日別のスーパーで安いからって９８円で買っていたばかりなのに、悔しいからってこっちのスーパーでも買わなけりゃ損するだろって、その理屈が意味不明。

なんでお前気づかなかったんだって殴られたし。しかも布団たたきで。この母親には理解に苦しむことしばし、全く、だ。

ぎぃやぁーーーーーーぁーーーーーーーーぁーーーーーー！！

という歓声とも悲鳴とも言いがたい身震いするほどの大勢の声と共に店の扉は開かれ、命が惜しければ大波に逆らわないのが必須条件だというように体が無意識に順応したため、たくましいマダム達の波に押されまくりあやうく窒息で絶命するかもしれないと一瞬頭によぎるほどだった。

僕が生死の境目に立たされている最中に、母さんがアメフト選手のように他のマダムにタックルをかましている姿を遠くで見たときは、ちょっと死んで見てもいいかなとも思ってしまった。

絶対骨にいってるだろうってくらい、母さんは全く容赦というもの

は持ち合わせていないようで。なるほど。日々トレーニングをしていたのはこのためだったのね。
　しかし、自分の身に襲い掛かる危険にはとても慎重になっているのか右手にはどこからか（多分陳列されているワゴンから引っ張りだしてきたんだろうけど）見つけてきたフライパンを持ち攻撃を仕掛けてくる他のマダムから身を守っていた。まるでその姿は血の飛び交う戦場で闘う兵士のようで、とても平穏な主婦を送っているようには見えなかった。
　こんな母から生まれた僕に果たして幸福は巡ってくるのだろうか……
　ふと頭によぎったことだが、母を一人の女性として考えたことは今までなかったが、なぜかこのときの母の姿＝全ての女性の真の姿を意味しているようで僕の心は好きな女の子に振られた時のような、何ともいえない複雑な心境になってしまった。
「おいっ！　早くこっちこい！！　てめぇいつまでそこに突っ立ってんだ！　ハゲ！」
　あちらでとても女性らしくないお言葉遣いでわたくしのお母さまが叫んでいらっしゃいます。興奮のあまりそうなっているのは分かるけど。でも、たかがスーパーの安売りでここまで人が変わるというのもちょっと……また僕には理解不能。
「母さんさぁ……落ち着きなよ。みっともないじゃんさぁ……」
「お前、この状態で落ち着いてみな！　即あの世行きだろ！」
　うむ。ごもっとも……
って落ち着いてる場合じゃなくて。
「ほら、お前も命が惜しいならば死ぬ気でかかれ！　敵は容赦してくれはしないぞ！」
　何の照れもなく本気でそんなセリフを言うとこらからして、母さんは闘う兵士になりきっているようだった。いや、奥さんどこからどう見ても立派な兵士でございます。
そんな状況を楽しんでいるのだろうか。目的は卵&トイレットペー

パーの奪還というところでしょうか。
また、ここぞとばかりに普段からの有り余った自分の力を撒き散らすことができるのだから、目的を達成する以外にまわりの敵兵への攻撃は惜しまないように見えて仕方ない。
あぁ～押すわ押すわ、でかい尻もここでは立派な武器じゃないですか！　お、今度は平泳ぎ。あの水かきは人間をかき分けるのにも対応してたんですねー。すごいですねー。
戦利品を勝ち取った母さんは僕もちゃきっとレジに並ぶよう命令し、最後の仕上げさえもたかが卵とトイレットペーパーのためにどんなミスも許さないようで。そしてただ頭数のためにだけ、息子を自身の戦にかりたてたんだろう。
主婦というものは日々このように身を削る思いをしてまで安いものには目がなく、どのような手を使ってでも欲しいものは手に入れたいのだろうか。
その割に、意外と大半の人は安さ上の付き物なのか購入することに満足してしまい、冷蔵庫の中にはまだかまだかと今も舞台の袖で出番を待ち望むも空しく、フレッシュな新人に先越されて主役を持っていかれた者たちがいることを知っているのだろうか。
僕には主婦になれる気がしない。自信がないです。あっぱれです母さん。

癒しの時間？

レジで支払いを終えた僕たちは戦場を後にして、少し寂しい思いをしながら帰路についていた。
（うーん、寂しくなるのはやはり刺激を求めているからか？）
「敬、つきあわせて悪かったな！もういい。早く学校に行って来な！」
「え、でもさ遅刻じゃんもう……」
「何いってんだ～遅刻ぐらいでびびるんじゃねぇよってんだ！　がっはっは！」
あら。普段僕が風邪を引いても熱でうなされていても、授業料がもったいないからと殴りかかってまで学校を休むことを許してくれない母なのに、自分に都合のいい時にはとことん甘いですな。
しかし、果たして今日の授業料と卵＆トイレットペーパーを比較してみてもわざわざ学校を遅刻してまで母さんに付き合う価値はあったのか疑問が生じる。
僕がこの人から生まれてきたのかと思うと本当に不安で仕方ない。
今から学校に向かっても、登校するのは正午前になるし、ここで思い切ってさぼるべきか、午後からの授業に参加するべきかで悩むところだな。
まあ、とりあえず行くことには意味があるので（さぼったといえば目の前の般若に殺されかけないだろうし）行くことにするか。
それに第一、あの娘の顔を見たいし話もしたい。
僕が教室に着いたころすでに昼食の時間に突入していた。といっても、すでに大半の生徒は昼食を終え、各自おはしゃぎタイムを満喫していた。
そんな中、僕に一番に気づいてくれたのが隣の座席の前川慶子（よしこ）だった。

「おはよ、敬くん。珍しいね遅刻なんて。」
めずらしいどころか初めてですから。
「う～ん。ちょっと色々家庭の事情があってさー。」
お、しまった、少し意味深なセリフを言ってしまったかしら。
「えっ家庭の事情なんだ……もう平気なの？」
少しの気まずさを表情に含めながらそういって彼女は少し下を向いた。
「へーきへーき。」
僕はまだいつもと同じぐらいのテンションに達していなかったので、それ以上の言葉がでなかった。
前川は、派手でもなくかといって地味でもなく特別美人というわけでもない。なぜか前川の醸し出す独特の雰囲気に包み込まれる瞬間がとても居心地よく思うことが多かった。
要因はただそれだけだったのかもしれない。
それは席が近くなって初めて気づいたことだし、それまではクラスメイトの一人でしかなかった。
前川は僕の知っている今までの女性のなかでダントツに女らしい空気を持っていたし、それを地でいっているところに僕は惹かれたのかもしれない。
頭もそこそこのレベルで、僕は席が近くなってからは何度か彼女から勉強を教わることもあった。
そして基本的に人と話す時は緊張するのか、ほとんど僕の目を見ようとはしない。常に前川の視線は僕の口元までしか上がらなかった。
もし隣の席が僕じゃなくても今と同じように恥ずかしそうに話をするのだろうか。そう思うと少し悔しい。前川にとっての僕はたまたま隣の席に座っているクラスメイトでしかないのだろうか。
それを確かめることはできない。
もし隣にいるのが前川でなかったのならば、僕は別の女子に好意を寄せていたのだろうか。いや、僕はこのクラスにいても他の女子に魅力を感じなかった。気の合う女子も中にはいるけれど、前川ほ

どお互いにプラスマイナスのいい関係が維持できそうな女の子はいないと思う。
　けれど、僕も少し前までは前川のことはほとんどといっていいほど眼中になかったし、今までに何度となく前川は僕の目の前を通り過ぎていたのだろうが僕はその存在をも空気のようにしか感じていなかった。
ある意味前川との接近によって僕のこれまでの価値観が変えられ、久々に誰かに心を寄せることができたという幸せも感じられることができた。
「敬ちゃん、これあげようか？」
　前川が僕の机に自分のカバンから取り出した飴をちょこんと置いた。そのしぐさがかわいい。
　前川がいつも食べている飴だ。時々前川からこのパインの甘い匂いがする。そんな時、それぐらい近くで会話をしていることに激しく胸が高鳴り、そのあとは彼女の唇にしか意識を集中できなくなってしまうようなことになる。ある意味媚薬だ。そして僕は接吻をすることにでもなってしまいそうだ。
しかしこれは、欲求不満というよりかは触れてはいけないものに触れてみたいという好奇心からくるもののような気がする。
　有名な美人画に髭なり鼻毛なりを付け加えて、いたずらしてみたくなるというような。
「前川、髪に何かついてるけど。」
　ほんとは何もないけどさ。ただ髪に触れてみたいと思って衝動的に言ってしまったことだった。
「あ、ありがとう。」
　また前川は恥ずかしそうにした。
前川の髪は肩まであって、いつも下ろしている。色は日本人形のような濃い黒なのだけれど、その重々しさを感じさせないほど彼女の髪はとても艶があり1本1本がとても繊細な線をうみだしていた。
　いたずらで髪をグシャグシャと掻き混ぜてみたこともあったけれ

ど（このときも無性に触りたかった）、彼女の髪はもつれる事もなく僕の指の間を砂のように流れていった。

黒魔術だとか白魔術だとかおまじないだとか、よく分からないけれど僕に知識があれば間違いなく彼女の毛を頂戴しているだろう。あの髪にずっと触れていたい。前川をずっと見ていたい。

まだまだ癒せるよ

昼一の授業でほとんどの生徒が睡魔に侵されている時、僕は一人こっそりハイテンションだった。まぁ、僕にとってはこれが１限目の授業のようなものだし。
隣の席の可愛い女の子を左肩に意識しながら、僕は数学の授業ノートをとるカタチを作りたまに黒板を見比べていかにも真面目に記録していますというようなカモフラージュをしながら、ノートにはまるまる１ページ前川と僕の似顔絵を描いていた。
前川の顔は、それといって特徴もなく結構難しいので黒髪の方の描写に力を入れすぎたためか、山姥と貞子を合体させたような生き物が出来上がってしまった。
これじゃ、自己満もくそったれ（？）もないな。などとガックリしながら、またはじめから前川を描いた。
うーん、なんか僕って精神年齢低いかな。今時健全な高校男児が好きな子の似顔絵なんか描いて楽しんでるなんてさ。結構痛い奴かもしれない。
とか考えつつも、先の山姥貞子よりもいくぶんましな前川が出来上がった。とりあえず髪型だけは完璧だ。無性にこの“前川”を前川に披露したいけど、幼稚なやつと思われるのもまずいしなぁ。また、逆にからかわれてるなんて勘違いでもされると僕の立場最悪だし。
やっぱおとなしく抹消するしかないか。
お気に入りの消しゴムで綺麗に跡形もなく“前川”は消え、ただ微妙に髪を描いた部分の筆圧が濃かったためか、あきらかに黒い何かを描いていたことがバレバレである。
気分転換にでも、授業ノートでも取ろうかな。
数学は、変に難しい漢字を使うこともなく０～９の１０種類の数字を駆使するだけで、あとはそれの応用で“ｘ”や“ｙ”や“＋”や“－”等といった決まった文字や記号を組み合わせるだけであった

ため、ノートに書き取るのには国語や英語のように頭を使うことはほとんどなかった。
けれど、たまに数学のくせに証明せよなどという問題がある。あれは全く分からないぞ。あのような文章仕立ての答えを求めてくるなど、数学の長所である公式を覚えれば怖いものなしという勉学に勤しむ者たちの根気をくじいてしまうではないか。
僕って基本的に面倒くさいこと嫌いなんだよね。だから、いちいち文章で説明しなくても答えだけ合ってればいいと思うし、だいたいそんな説明にさ、模範解答なんてあってはいけないんじゃん？と思うこのごろ……
あーくそぉ。またくだらない思考を働いてしまった。なんだかんだ文句言いながらもきちんと手際よくノート取る僕ってダイブ真面目君（笑）
でも、暇。前川何してるかな。右側に重心をかけて頬杖をつき、さりげなく隣の席に座っている可愛い少女の顔を覗いた。
僕以上に真面目に先生の話聞いているみたい。僕に気づく様子もないので、声にならない声で「ま・え・か・わ」とささやいてみた。
隣の席の微妙な動きを察知したのか、「やだぁ、見られてたぁ」というような表情でこっちを見返してきた。このときさすがの前川も目を合わさずにはいられなかったのか、不意をつかれたような眼差しで僕を見た後、またいつものように視線を僕の口元に移した。
とくに会話なんて思いつかなかったので、「暇。」と僕が言ったら「えへっ。難しいね数学。」はにかみながら前川はそう返事した。
前川から生まれる雰囲気には僕はどうすることもできないみたいだ。息をするかのように自然に発する、言葉の端々に僕は感動しまくった。
“えへ”や“うふ”など前川は自然に口から出るようで、それはぶりっこで男に媚びているようでもなくて、どうも自然さを感じる。
んなわけねーだろ！　と思われるかもしれないが、何せ僕の天使はそうでなければいけないんだ。ということで御免遊ばし。

あーでも僕は何でもっと積極的にできないんだろう！　女の人の前にでるといつも萎縮して受身になってしまう。せいぜいやれることは、冗談と楽しい談話のみ（自分で言うか？）。楽しく下校してみたいものだし、デートなんてのもできるならやらせていただきたい。

恋って。

やはり積極的にアプローチしなくては前川のようにフラフラ（いやフワフワか？）した女子には効果がないのではないだろうか。結構押せばうまくいくのかもしれない。そんなタイプだけれど、逆に断れ切れないタイプでもある。好きじゃなくても社交辞令で付き合われるということにもなりかねない……

おーーい。どうすりゃいいんだぁぁい。

遠まわしに前川にアプローチするくらいなら、はっきりと告った方がいいのか？　それとも、前川を確実に落とすまで忠犬ハチ公のように待つのか？　一体僕にはどれがお似合いなんだー！

とまあ、一人で盛り上がったとこで置いといて、前川でもいじろうかな。

「前川さん。あなた、知っていましたか？　わたくし、実は今おトイレを我慢しているということを。」

「ふ…ぇっ？」

「それも、小さいのでもなく大きいのでもないのです。さぁ、一体何をがまんしているのでしょうか！」

そう言った途端前川は苦笑いになり、小さく「もぅ」と言った。

「ねぇねぇ前川さーん、答えて下さいよー。ヒントは男特有の生理現象ってとこですかね～。はい、もうこれ以上言えませんよー。」

「……変態。」

前川は少し怒ったような表情をしたが、すぐにそれは笑いに変わった。僕は知っている。前川が結構な下ネタ好きであるということを。自分が下ネタを口にすることは一切ないのだが、あきらかに９０％近い確率で何処かの誰かが言った下ネタにさえもご丁寧にクスクスと笑っているくらいなのだ。

僕は以前、おとなしい人ほど実はそういう話が好きなのだという統計を独自で行ったことがある。見事前川はその統計の証明に貢献

してくれた。少しでもエッチな話に反応してくれる方がこっちとしても、盛り上がりがあるってものだし第一もしもの時の理解力がわずかながら期待できると思っている。
残念ながらこのクラスにも頭のかたい女がいて、そいつはルックス的には男の人気は高いのだが性格の不一致という理由から不評でもある。まず、ユーモアがなく真面目すぎる。そして何よりも男の捨て身のトークでさえも、馬鹿じゃないのと切り替えしてくる。誰がそんな女と一緒にいたいですか？　いやらしいことをしてみようならば、たとえお付き合いをしていても婦女暴行で裁判にかけられることにもなりかねないくらいなんですから。
また、レズの話はおやつレベルに好物なくせに、そして生々しいほど美化するくせに、男と女の恋愛はひどく毛嫌うプッツン女もいる。ホモも許せないんだとよ。要するに男に自分が受け入れられないだけじゃないですかって話なんですけどね。自分を綺麗にしてから語って下さいってことですよ。
あ、なんか僕って前川以外には結構辛口かも・・・・・・。
ってか前川をぎゅーと抱きしめたい。理性が飛びそうだよ全く僕ってばさ。前川一体あんたは何考えてるんですかい。僕のことどう思ってるんですかい。
好き？　嫌い？
僕は好きなんですが、伝わってないですよねー？　ですよねー。だから悩んでるんだっての。（あーむなし）

ヨシコです。

日曜の夜になると次の日のことを考えるだけで憂鬱になる。登校拒否の一歩手前くらいの気持ちだ。

風呂あがりの火照った体を冷ましながら、ふやけた足を机の上に乗せ爪に何重にも塗りたくられたマニキュアを綺麗に拭き取る。

休日の楽しみは、足の爪にマニキュアを施して、少し大人の気分を味わうことだった。

（チャラリンチャラリン）

携帯の着信音がなり、手を伸ばしてカバンに入れて置いた携帯を取りだした。メールが届いたようだ。相手は……

《ここをみよ！　ｗｗｗ：／／ｅｎｊｏｙ．ｓｈａｍｅ／ｙａｔｔａｙｏ．ｋａａｓａｎ．／ｇａｚｏｏ．》

本当は別に見る価値もないわけであるが、とりあえずアドレスをクリックした。そこには、案の定見慣れた顔があった。最近携帯の使い方を知った母が、調子に乗って自分がカメラで撮影した写真に色々な装飾をつけすることに夢中になっているようで、キラキラのフレームに囲まれた、我が家のトイレが母の背景に映し出されていた。母は画面の中で便器に向かって「ホラホラ！」といわんばかりの笑顔を作っていた。そこには、“ＢＩＧ”の文字が入っていて、画像をよく見ると見にくいながらも便器の中にはまさにＢＩＧなものが浮かんでいた。

このＢＩＧは今できたての母のものだろうか……。だろうね。下品なものまでも芸術品に仕立て上げようとするその根性はどこから生まれてくるんだ。

この前川家の母親は、昔ミスコンか何かで優勝したほど年齢の割りには綺麗な女性なのだが、その外見あまり内面のギャップに悩まされた男は数知れず。本人いわく、パパはママのストーカーだったそうだ。

わざわざ暇人につきあってる義理もないので、足の爪を綺麗に整えることに集中した。なぜかこうして爪をいじってる間は自分が可愛い女の子に感じて仕方ない。私も少しは女の子らしいところがあるんだなと思うととてもいじらしくなる。

毎朝起きるために、ステレオのタイマーをセットした。今マイブーム到来の日本語なのか英語なのかも分からないような流暢なラップが入りまじった『ヨシコＢＥＳＴ』をかける。これはあたしの脳内分泌を活発にさせる効果がある（と信じている）。そのためにわざわざ『ヨシコＢＥＳＴ』などと編集したのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1853a/

こんな日もある

2010年12月4日15時04分発行